

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370011

研究課題名(和文) 大乘仏教思想史における道元思想の意義の解明

研究課題名(英文) The explication of significance of Dogen's thought in the history of Mahayana Buddhism

研究代表者

頼住 光子 (YORIZUMI, Mitsuko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：90212315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：従来の道元研究は、宗学(道元を開祖として絶対視した上で成り立つ曹洞宗門の道元研究)と和辻哲郎に端を発する宗門外の哲学・思想研究者による道元研究が中心であった。これらは、多くの成果を上げてきたものの、硬直化した解釈に陥ったり、また、自己の哲学・思想的背景を短絡的に道元に当てはめたりという傾向も見られた。本研究ではこのような問題を解決すべく、(1) 道元の世界把握に着目して『正法眼蔵』の諸巻に対する厳密なテキスト・クリティックに基づき、その独自の思想構造を、その独自の世界把握に着目してテキスト内在的に解明した。(2)(1)を基盤とし大乘仏教思想史という観点から道元の思想的意義を多角的に解明した。

研究成果の概要(英文)：The previous study of Dogen's thought mainly consisted of shugaku (宗学) and philosophical one. The shugaku is the official studies of the Soto school of Zen Buddhism (曹洞宗), in which the scholars deeply embraced Dogen as a founder and had a tendency to follow the traditional interpretation of the school. On the other hand, the philosophical study was conducted out of the Soto school. In Japan, it was started by Tetsuro Watsuji (和辻哲郎), a well-known ethicist, in Taisho era, and it had a tendency to apply the western philosophical concepts to Dogen's Shobo-genzo without deep consideration. Although a large number of research have been carried out into Shobo-genzo, there is little precise interpretation of it. Therefore I criticized precisely the text of some rolls of Shobo-genzo, and I made clear Dogen's comprehensive view of the world. I also analyzed it from a standpoint of the history of Mahayama Buddhism and explicated significance of his thought multidirectionally.

研究分野：倫理学・日本倫理思想史

キーワード：『正法眼蔵』注解 道元の世界把握 大乘仏教史上における道元 道元との思想比較 『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」巻 鎌倉仏教

1. 研究開始当初の背景

本研究は、(1) 道元思想の思想構造をテキスト内在的に解明すること (2) (1) を基盤として大乘仏教思想史という観点から道元思想の思想的意義を多角的に検討すること この2点を目指す、以下に、それぞれの学術的背景を明らかにする。

まず、(1) テキスト内在的な研究の学術的背景について述べる。従来、道元思想は江戸期以来の伝統をもつ宗学(曹洞宗の宗門としての学問)を中心に進められてきた。そこでは自らの信仰や坐禅体験を反映するかたちで『正法眼蔵』が読解された。特に明治期の宗学において「本証妙修」をはじめとする道元理解の方向性が確立されると、宗門の内外に関わらず、道元研究に大きな影響を与え、かなりの程度パターン化された道元理解が一般化されるに至った。近年は、文献として道元を正確に解読しようという動きが国内外で活発になっているとはいうものの、私見ではやはり宗学の読みの型を踏襲した解釈が目立っている。

宗学とならんで近代の道元思想的研究に大きな影響を与えたのが、和辻哲郎、田辺元ら西洋哲学研究者による道元研究である。広い意味では寺田透や森本和夫らによる道元研究もこの範疇に含まれる。彼らの西洋哲学の概念や理論構成を基盤とする道元解釈は、それまでのパターン化された宗学的な道元の読解に新たな視点をもたらし、道元思想を思想それ自身として研究する方向性を打ち出した点で大いに道元研究に貢献した。とはいえ、その研究姿勢には、西洋哲学の概念に道元のテキストをやや強引にあてはめるといった傾向が無いわけではない。

また、近年、「批判仏教」派を中心に宗学の見直しが叫ばれているが、『正法眼蔵』七五巻本の思想的達成を否定するなどの問題点を抱えている。

以上のような研究状況の問題点を解決すべく、研究代表者は、これまで道元思想を『正法眼蔵』本文の厳密なテキスト・クリティックに基づいて、テキストそれ自身のもつ意味内容を解明することを試み、その成果を著作や論文、口頭発表を公開してきた。これらによって、本研究でさらにテキストの精密な読解に基づく研究をより広範かつ体系的に推進する準備が整ったといえる。

次に、(2) の大乘仏教思想史という観点に立脚した研究の学術的背景を説明する。前述の問題点を克服し、適切に道元思想の固有の意義を闡明するために、本研究では、インド～中国～日本という大乘仏教の思想の流れの中で道元思想を検討する。道元は、大乘仏教の根本思想である「空 縁起」に立脚して、人間の思惟の傾向性と言語の機能への誤解によって起こってしまう「実体化」が、仏教思想それ自身の中ですら起こっていることを鋭く批判した。私見では大乘仏教の歴史は、この「実体化」と、それに対抗する「空

縁起」の宣揚という二つの動きによって展開しており、その展開の中に適切に位置付けてこそ、道元思想の独自性が明らかになる。道元思想を大乘仏教思想史という広いパースペクティブから解明する研究は従来ほとんど行われていないが、研究代表者がこれを着想するに至ったのは、道元と親鸞の比較研究を行い、著作、論文等で発表したことによる。彼らを宗派の枠を超えて大乘仏教思想家として研究することを通じて大乘仏教思想史という観点から道元を(そして親鸞も)研究することの重要性を知るに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

(1) 道元思想の思想構造を、その独自の世界把握を軸に『正法眼蔵』等テキスト内在的に解明する。

(2) 大乘仏教史という観点から道元思想の思想的意義を多角的に検討し解明する。

この2点は、(1) を基盤としつつ、(2) が遂行されるという関係であり、さらに大乘仏教思想史の観点からの研究の成果が(1) のテキスト内在的読みを深化させるという相互相依の関係でもあり、両者の併行的遂行によって、それぞれ、より大きな成果を挙げることが期待される。

(1) については、道元思想の思想構造の文献的解明のために不可欠な、『正法眼蔵』本文の注解を、特に大乘経典との繋がり深い「摩訶般若波羅蜜」「諸法実相」「仏性」「海印三昧」「法華転法華」「観音」巻等を中心に行う。その際、宗門の通念的な解釈や宗教的信仰や実践的実感に基づく主観的な思い入れにはよらず、また何らかの歴史的通念から演繹して解釈するのではなく、あくまでもテキスト内部の論理構造の把握を目指す。

(2) としては、主に親鸞思想との比較と、『法華経』『華嚴経』『涅槃経』などの主要大乘経典や天台教学の道元の受容様態の解明をめざす。

3. 研究の方法

平成25年度については次のような方法の下で研究を遂行した。

(1) 疑問点の多い『正法眼蔵』本文の、校訂、諸異本の校合を「摩訶般若波羅蜜」「諸法実相」「仏性」「海印三昧」「法華転法華」「観音」巻等について行うための準備をする。そのために書写本等を調査する。

(2) 道元が『正法眼蔵』執筆の際に参照したと推定される中国禅の典籍の調査収集に着手する。これは量的に膨大であり、そのなかには、翻刻、公刊されていない入手困難なものも含まれており、これについては、必要に応じて各地の禅宗系寺院、仏教系大学等、関係諸機関を調査する。

3) 以上の文献的な手続きを踏まえた上で、上記諸巻の全文注釈に着手する。その際、従来

解しがたいとされ、十分に解釈されていない難読箇所については、『正法眼蔵』全巻の用例を参照して解釈を行う。また、特異な文体については類型化し解釈を検討することで読解の精度を高める。

(4) 以上の校訂、註釈、解釈作業に基づき、道元の思想的構造を解明する。

(5) (1)～(4)を前提に、大乘仏教思想史上の道元の意義の解明のための基礎作業を開始する。具体的には、『教行信証』等、親鸞の著作の思想的解明、主要大乘仏典や大乘教義に関する文献の調査収集である。

(6) (1)～(5)の思想的成果について学会で口頭発表、論文発表、研究報告等を行なう。

平成 26～28 年度については以下のような方法の下に研究を遂行した。

(1) 初年度に着手した『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」「諸法実相」「仏性」「海印三昧」「法華転法華」「観音」諸巻についての本文校訂、諸異本の校合をさらに続行する。

(2) 初年度着手した中国禅の典籍の調査収集を続行する。

(3) 上記の『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」「諸法実相」「仏性」「海印三昧」「法華転法華」「観音」諸巻の全文注釈を、用例参照、文体の類型化などをふまえ続行する。さらに上記諸巻以外にも研究上必要であれば、他の巻についても、テキスト・クリティークや注釈を行なう。

(4) 以上の校訂、註釈、解釈作業に基づき、道元の思想的構造を解明する。

(5) (1)～(4)を前提として、大乘仏教思想史上における道元の位置づけの作業を続行する。

(6) (1)～(5)の思想的成果について学会で口頭発表、論文発表、研究報告等を行なう。また、出版社と具体的な計画をすすめている道元関係、日本大乘仏教関連の図書出版を実現させる。特に、海外発信について留意し、英語の論文発表を行い、また、海外における関連研究集会で口頭発表を行う。

4. 研究成果

(1)の「道元の思想構造を、その独自の世界把握を軸に『正法眼蔵』等テキスト内在的に解明する」に対する研究成果は以下の通りである。

注釈の対象とした『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」「諸法実相」「仏性」「海印三昧」「法華転法華」「観音」の諸巻テキスト本文の確定を行った。本文確定のために『正法眼蔵』本文の成立と受容について、道元教団の成立、展開史に注目して解明した。そして、その研究成果を考慮して、諸写本を校合の上、本文を確定した。校合する対象とするのは、道元真筆本、懷甞書写本、永平寺蔵古写本、洞雲寺本、乾坤院本、正法寺本、梵清本、玉雲寺本、長円寺本、永光本、広福寺本、瑠璃光寺本、本山版秘密正法眼蔵本等である。また道元が参照したと推定される中国禅の典籍を

調査研究した。

次の段階としては古注、新注など現在まで多数知られている『正法眼蔵』注釈本を収集調査して検討した。さらに『正法眼蔵』中の用例を参照した。本文の解釈を確定した。調査・検討の対象としたのは『御抄』をはじめとする『正法眼蔵註解全書』所収の諸古注と、西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵』全12巻、高橋賢陳『正法眼蔵全巻現代語訳』上下、中村宗雄『全訳正法眼蔵』全4巻、増谷文雄『正法眼蔵現代語訳』全8巻、玉城康四郎『現代語訳正法眼蔵』全6巻、石井恭二『現代文訳正法眼蔵』全6巻、春日佑芳『「正法眼蔵」を読む』全6巻、森本和夫『「正法眼蔵」読解』全10巻、田中晃『正法眼蔵の哲学』『道元禅の世界』1,2等の新注である。

注釈に際して特に『正法眼蔵』の特異な文体に着目して研究を遂行した。文体については、従来の研究において或る程度類型化し、その文体のパターンを把握しているため、これらについてさらに有機的連関を考慮しつつ検討した。

以上の作業を踏まえて道元の思想構造について、道元の存在観、世界観、言語観、真理観、行為論、時間論、自己観、他者観の点から検討を加える。特にその思想的中心軸をなす「空 縁起」に注目して体系的な解明を行った。

～ の研究成果の一部について、著作、論文、学会や研究会における口頭発表、講演等を通じて公開した。

(2)の「大乘仏教史という観点から道元の思想的意義を多角的に検討し解明する」に対する研究成果は以下の通りである。

まず親鸞の思想について主著『教行信証』を中心として他の諸著作、書簡、関連する語録を中心に調査検討した。この検討を通じて、特に道元との比較において重要である「仏性」「空」「善悪」「身体」「他者」「言語」「真理」等の概念を解明した。

さらにはアジアの仏教思想の展開において親鸞、道元の思想が果たした役割を検討した。特に、仏教思想の中軸をなす「空 縁起」概念が、人間の思惟活動それ自体のもつ傾向性や言語の機能に関する誤解により「実体化」されて、誤った理解が広く行なわれたことを、両者が前提とした中国禅、中国浄土教において具体的に示し、その上で、実体化傾向に対して、両者とも仏教の根幹たる本来の「空 縁起」思想に立脚して批判したことを示した。このことを通じて、道元と親鸞の思想を比較するとともに、両者が仏教史の中で果たした役割を具体的に示す。また、大乘仏教の思想的特徴である「共同成仏」に関連して、両者がどのような構造的な理解を構築しているのかを検討し、その特徴と意義を解明した。

『法華経』『華嚴経』『涅槃経』などの主要大乘経典や天台教学をはじめとする主要大乘教義に対する道元の受容の様態を検討し

た。まず、それぞれの経典がインド～中国～日本の大乘仏教思想史上でどのような展開過程を示しているのか、特に道元や親鸞に先立つ中国の教学においてどのように受容されたのかを解明した。そして、その受容における問題点を、「実体化」をキーワードに洗い出し、どのようにその問題点を道元や親鸞が克服しようとしたのかを検討した。

～ の研究成果の一部について、著作、論文、学会や研究集会における口頭発表、講演等を通じて公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 12 件)

1. 頼住光子「日本における仏教と儒教との関係についての一考察」(『倫理学紀要』第 24 輯 東京大学文学部倫理学研究室 2017 年 3 月 31 日、pp.176-225、査読無)
2. 頼住光子「和について」(荒木勝監修・邊英浩編集『東アジアの共通善 和・通・仁の現代的再創造をめざして』第 4 章、2017 年 3 月 30 日、岡山大学出版会、pp.65-78、依頼原稿)
3. 頼住光子「日本思想における「和」「和を以て貴しとなす」と「和敬静寂」をてがかりにして」(荒木勝監修・邊英浩編集『東アジアの共通善 和・通・仁の現代的再創造をめざして』第 5 章、2017 年 3 月 30 日、岡山大学出版会、pp.79-93、依頼原稿)
4. Yorizumi, Mitsuko “Some Aspects of Watsuji Tetsurō’s Ethics of Aidagara (Betweenness): On the Formation of His Ethics from the Viewpoint of His Ideas on Form and the Flow of Life” (『倫理学紀要』第 23 輯 東京大学文学部倫理学研究室 2016 年 3 月 pp.1-14、査読無)
5. 頼住光子「比較思想の方法論に関する一考察」(『比較思想研究』第 42 号 比較思想学会 2016 年 pp. 68-73、査読有)
6. 頼住光子「日本思想における共生」(『比較思想研究』第 41 号 比較思想学会 2015 年 pp. 24-48、査読有)
7. 頼住光子「共生」をめぐる一考察 仏教・儒教・神道の観点から」(『倫理学紀要』第 22 輯 東京大学文学部倫理学研究室 2015 年 pp.24-48、査読無)
8. 頼住光子「『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」巻に関する一考察」(『駒澤大学佛教學部論集』第四十六號 2015 年 pp.23-52、依頼原稿)
9. 頼住光子「武士の思想に関する一考察 仏教との関係を手がかりとして」(『倫理学紀要』第 21 輯 東京大学文学部倫理学研究室 2014 年 pp.1-22、査読無)
10. 頼住光子「井筒俊彦と道元」(『道の手帖 井筒俊彦 言語の根源と哲学の発生』河出書房新社 2014 年 pp.153-161、依頼原稿)
11. 頼住光子「『正法眼蔵』「仏性」巻にみられる道元の世界観に関する一考察」(『日本の哲学』第 15 号 日本哲学史フォーラム 2014 年 pp.115-132 依頼原稿)
12. 頼住光子「日本仏教における中世と近世 「修行」から「修養」へ」(『人文科学研究』第 9 巻、お茶の水女子大学、2013 年 pp.13-26 査読有)

〔学会発表〕(計 20 件)

1. 頼住光子「『正法眼蔵』「現成公案」巻の思想」(京都大学「道元の世界観」研究会、2017 年 3 月 27 日、京都大学文学部校舎 1 階会議室、京都府京都市)
2. 頼住光子「日本思想における「和」について」(天台宗埼玉教区・布教師会主催研究会、招待講演、2017 年 3 月 14 日、川越・喜多院齋堂、埼玉県川越市)
3. 頼住光子「『正法眼蔵』「現成公案」巻の思想」(曹洞宗福岡宗務所研究会、招待講演、2017 年 3 月 1 日、曹洞宗福岡宗務所、福岡県福岡市)
4. 頼住光子「日本文化と仏教」(足立区生涯学習センター放送大学連携講座 招待講演、2017 年 1 月 8 日、放送大学足立学習センター、東京都足立区)
5. 頼住光子「道元の仏性思想」(曹洞宗遊行会第 27 回布教研修会、招待講演、2016 年 8 月 29 日、長泉寺、宮城県角田市)
6. 頼住光子「日本的儒教與佛教關係」(日本における儒教と仏教の關係について) (臺灣大學人文社會高等研究院東亞視域中的儒佛論爭與會通國際學術研討會、招待講演、2016 年 4 月 27-28 日、臺灣大學社會科學院、台湾・台北市)
7. 頼住光子「『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」巻について」(曹洞宗遊行会、招待講演、2016 年 2 月 19 日、曹洞宗檀信徒会館、東京都港区)
8. 頼住光子「日本思想の中の「無常」」(皇学館大学神道学科・神道学会共催講演会、招待講演、2015 年 11 月 20 日、皇学館大学、三重県伊勢市)
9. Yorizumi, Mitsuko “Some Aspects of Watsuji Tetsurō’s Ethics of Aidagara (Betweenness): On the Formation of His Ethics from the Viewpoint of His Ideas on Form and the Flow of Life” (“East Asian Ethics: Lessons from Japanese Confucianism” 「日本儒學視域中的東亞倫理學」國際學術研討會、招待講演、2015 年 8 月 21 日、臺灣大學人文社會高等研究院、台湾、台北市)
10. 頼住光子「道元入門」(道心会、青年のための仏教講座、招待講演、2015 年 6 月 20 日、善光寺大本願、長野県長野市)
11. 頼住光子「空海思想と高野山」(朝日カルチャーセンター(新宿校)、依頼講演、2015 年 3 月 20 日、東京都新宿区)
12. 頼住光子「比較思想研究の方法論に関する

- る一考察」(比較思想学会東京例会、白熱パネル「イマ、比較思想を問う」パネル、招待発表、2015年3月7日、大正大学、東京都豊島区)
13. 頼住光子「『正法眼蔵』「現成公案」巻の思想」(駒澤大学仏教会平成二六年次大会公開講演、招待講演、2015年1月26日、駒澤大学、東京都世田谷区)
 14. 頼住光子「日本思想における共生」(比較思想学会平成26年度大会シンポジウムパネル、招待発表、2014年7月20日中村元記念館、島根県松江市)
 15. 頼住光子「法然「選択本願念仏集」の思想」(第307回道心会「青年の為の仏教講座」、招待講演、2014年6月28日、善光寺大本願、長野県長野市)
 16. 頼住光子「「無常」を生きる 日本の思想・文化の中の「無常」」(招待講演、2014年2月9日、放送大学多摩学習センター、東京都小平市)
 17. 頼住光子「道元の思想 「現成公案」巻読解をてがかりとして」(日本哲学史フォーラム、招待講演、2013年12月7日、京都大学、京都府京都市)
 18. 頼住光子「道元の出発点としての無常」(曹洞宗北信越管区教化センター布教師研修会、招待講演、2013年10月29日、シーユース雷音、新潟県柏崎市)
 19. 頼住光子「『選択本願念仏集』の思想構造の探求」(浄土宗長野教区第71回教学普通講習会、招待講演、2013年8月26日、善光寺大本願、長野県長野市)
 20. 頼住光子「道元に学ぶ」(第693回『仏教文化講座』、招待講演、2013年8月21日、新宿明治安田生命ホール、東京都新宿区)

〔図書〕(計 2 件)

1. 頼住光子『さとりと日本文化』(ぶねうま社、2017年2月24日、pp.1-266、単著)
2. 頼住光子『『正法眼蔵』入門』(角川ソフィア文庫、2014年 pp.1-231、単著)

6. 研究組織

(1)研究代表者

頼住 光子 (YORIZUMI, Mitsuko)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90212315